

2021 年度日本語教育学会学会賞 受賞コメント

神吉 宇一（武蔵野大学・准教授）

元プロ野球選手の福本豊さんが国民栄誉賞の授与を打診されたときに「そんなもろたら XXX もでけへんようになる」と言って断ったという有名な話があります（XXX 部分は各自検索してください）。僕はこの話を聞いたときに、「かっこええなあ」と思いました。自分もいつか、そうやって権威的なものに対抗できるチャンスがあるかなあと漠然と考えていました。今回、「学会賞」の内示と、受諾するかどうかという確認のご連絡をいただいたときに、権威への対抗を示す絶好の機会？のはずでした。ですが、ここにこうしてコメントを認めているように、この栄誉ある賞を謹んで、また喜んでいただくこととしました。学会賞受賞の知らせを受けたとき、いろんな人たちの顔が思い浮かびました。今まで、日本語教育に関する研究・実践に二十数年関わる中で、本当に多くの人に支えられ、助けられ、また学びを得てここまでやってきました。そういう人たちの顔を思い浮かべると、やっぱり受賞すると喜んでくれるよなあと思いました。また、僕自身が学会の役員をやっていたこともあり、この賞のために推薦者の方や選考する方々が、大変な時間と労力をかけてくださっていることも承知していて、簡単に断ることもできないよなあと考えたのも事実でした。そしてもちろん、自分自身がこれまでやってきたことが評価されたことに対する素直な喜びというのもありました。そういうことで、僕の中では、「福本のようなかっこいい辞退」という夢想は、現実的な選択肢にはなりえませんでした。破天荒になりきれない自分自身に対して、これが自分の良さでもあり、もしかしたら限界でもあるのかなと感じました。そして、自分が外から見ていて「いいな」と思うことと、実際に当事者になるのでは違うよなあという当たり前のことを、改めて感じました。



当事者として考えるというのは、かようにいろんな関係性の中で判断を迫られるということなのだと思います。僕が近年取り組んでいて、受賞理由としても評価してもらった日本語教育の政策に関わることや制度設計に関することも、同様の観点から考えられます。日本社会では、まだまだ日本語教育が「外国人のもの」という視点・発想で考えられています。ことばは人々が社会を構成するための重要な基盤です。ことばは社会の中にあり、人と人之間にあると言ってもよいでしょう。そう考えると、日本語教育はこの社会について考えることであり、社会に存するすべての人々や事物に関係のあることとなります。これからの日本社会を考えたとき、当事者としての意識を持って日本語教育について考える人をどれだけ増やしていけるのか、これが大きな課題であり、僕がこれから取り組んでいきたいと考えていることの大枠です。日本語教育は日本社会の今後を考える上で最重要の課題と言っても過言ではないと思います。

ありがたいことに、職業人生を 10 年以上残した形で大きな賞をいただくことができました。ここで満足せず、これからさらに精進せよということだととらえ、より一層、日本語教育の研究、実践活動に取り組んでいきたいと考えています。このたびはありがとうございました。

2021 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

小口 悠紀子（広島大学・准教授）

小学生の頃、頂き物のジュースの空き缶の山を見て、もったいないな、なんか使えへんかなあと、底をペンで叩いてみました。すると、全て音色が違うことを発見。音階順に空き箱に並べて、「缶楽器」と適当に名づけ、夏休みの自由研究として提出しました。それがまさかのクラスで大ヒット。工作展で市長賞をもらい、新聞に載りました。「え？並べただけで？」「あれで市長賞？」って、自分でも思いましたけど（笑）、今回の受賞の連絡も「なんでやねん」と家族に言われながら、大変嬉しく受け取りました。



日本語教育の世界に飛び込んで間もなく 20 年。「おもろい」という直感を頼りにひたすら進んできました。今回の受賞は、皆様からのあたたかい応援のお気持ちと、もっと頑張りや、というエールだと感じ、身の引き締まる思いです。受賞の荣誉にあずかり、恩師である畑佐由紀子先生、迫田久美子先生、そして大学や専門分野の枠にとらわれず、日々ご指導くださる皆様に改めてお礼申し上げます。

受賞理由に挙げてくださった論文のうち、『日本語教育』に掲載された 2 本を書いた時のことは一生忘れられません。「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識と運用—未出か既出かによる使い分けに着目して—」（166 号）は、末期癌の母の病室で寝泊まりしながら仕上げました。2 回の不採用を経ての掲載でしたが、その喜びを母と分かち合うことは叶いませんでした。亡き母は国語教師でした。それで次は教師にしか書けない論文を書こうと心に決めました。しかも、読んだ人が「こんな自分もできるわ」と思うような論文にしたいと考えました。もっとも実践を気軽に共有する若い教師が増えてほしい、そう願ってのことでした。そうして生まれたのが「大学の初級日本語クラスにおけるタスクベースの言語指導—マイクロ評価に基づく考察を中心に—」（174 号）です。この論文は最終稿の提出時期が、出産と重なり、3 時間おきの授乳の合間に仕上げました。生まれたばかりの我が子を前に、育児に専念できない性格に悩み、自分を責めました。ただ、死と生と向き合いながら歩む中、どんな人生経験も教育や研究を豊かにするというのは本当だなと感じました。今、苦しい状況にいる方にエールを送ります。

今回の受賞理由に「地域の具体的な課題に取り組む」姿勢とありましたが、私の日本語教育の出発点は、広島大学のそばにある地域の教室です。ここで仲間と共に研究と実践の往還を目指して切磋琢磨しながら過ごした日々は宝物です。今、その地で再び日本語教育に携わることができていることを幸せに思います。最近、力を入れているのは防災学習。阪神大震災と平成 30 年 7 月豪雨による被災者をそばで見えてきた自分だからこそ、できることがあると感じています。

冒頭の「缶楽器」ですが、実は提出後、クラスメイトの要望に応じて数字の楽譜を追加したんです。ピアノが苦手な子でも、外国から来たばかりの子でも、数字通り叩けば「ちょうちょ」など童謡のメロディが簡単に奏でられるように。周りの声からニーズを拾い、アイデアを使って楽しいものを生み出す、そんな小さな積み重ねをこれからも続けていけたらと思っています。

2021 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

市江 愛（東京都立大学・博士研究員）

この度は『日本語教育』論文賞を賜り、大変光栄に存じます。学会から茶封筒が届き、なにかよからぬことでも…と不安を感じながら封を開けたところ、受賞のお知らせが入っていました。しばらくは信じられませんでした。受賞理由を拝見したとき、いろいろな想いが込み上げてきました。

この論文は、博士課程の最後に執筆したものです。条件表現といえば、必ずト・バ・タラ・ナラの話になるのですが、「私はモシに注目していて…」と言うと、きよとんとされることが多くあります。よく、今まで注目されてこなかったことは、まだ見つけられていない貴重なものか、それとも注目に値しないことかと言われますが、

私の研究は後者なのではと不安に感じていました。そのような中で受賞理由を拝見し、自分がおもしろいと思ったことを、他の方にもおもしろいと思ってもらえたのだと実感でき、自信にもなりました。大学院修了後どうしようかと悶々とする中で、自分の研究を評価していただい、「日本語教育の道が続いていいんだよ」と背中を押してもらえたようにも感じました。

また、今まで自分の研究の立ち位置について悩むこともありましたが、今回の論文の執筆を通して見えてきたことがあります。それは、「第二言語習得研究と日本語教育学の知見を柔軟に組み合わせ、日本語教育の場にわかりやすく還元すること」です。第二言語習得にはさまざまな理論や方法論があり、日々進化しています。今回用いた自己ペース読文実験も、第二言語習得の仲間から発想を得ました。第二言語習得の知見をもとに、適切な手法と十分な要因統制を行うことで、日本語教育学に新たな知見をもたらすことができると考えています。私ではまだまだ力不足ですが、これからも、日本語を学ぶ人、日本語を教える人にとって少しでも参考になる研究ができればと思っています。

今回このような光栄な賞を賜りましたが、今の私があるのは多くの方に助けていただいたからです。奥野由紀子先生には大きな器とあたたかい心で導いていただきました。奥野先生から学んだことが、研究・教育どちらにおいても私の土台となっています。研究仲間にはたくさんの刺激をもらいました。ときには一緒に涙を流し、励まし合い、くだらないことで笑う。そのような仲間ができたことは私の財産です。さらに、今回の実験は 150 名以上の方に協力いただきました。私一人では到底集められず、さまざまな機関の先生・学生のお力添えのおかげで成し遂げられました。見ず知らずの私に快く協力し、あたたかい声をかけてくださるなど、みなさまのやさしさに何度も助けられました。最後に、学会関係者のみなさま、貴重な時間を割き、私のような若輩者にもチャンスをくださったこと、心より感謝申し上げます。「焦らず、自分のできることを一つずつ。見てくれている人が必ずいるから。」という恩師たちの言葉が身に染みしました。当時の私のように、自分の研究の意義や立ち位置で悩んでいる大学院生の方にとって、少しでも励みになればと願っています。この度は、誠にありがとうございました。



2021 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

松下 達彦（国立国語研究所・教授）・佐藤 尚子（千葉大学・教授）・笹尾 洋介（京都大学・准教授）
田島 ますみ（中央学院大学・教授）・橋本 美香（川崎医療福祉大学・教授）

「ウーッ…」筆頭発表者の松下は、バリ島での日本語教育国際大会での発表前日におなかを壊し、共同発表者がランチや懇親会でバリ料理を堪能している間にホテルの部屋で朝から七転八倒していました。夕方には痛いおなかを押さえながら這いつくばるように発表会場の下見に行きました。松下の様子を見た会場係の方が親切に病院への車を手配して下さり、即入院。一晩でウソのように回復して翌日の発表時には完全復活し、無事に発表を終えました。（松下は）心がけが悪くて“バリ腹”になってしまいましたが、現地の係や病院スタッフの方の親切は忘れられません。今回、賞を頂いたのは、この時の発表内容を論文化したものです。



受賞通知をいただいたときは、「よし！」（“七転八倒”が報われた）とうれしかったのですが、少し意外に感じた部分もありました。最後に少し項目分析を入れる予定でしたが、先行研究部分を書きすぎたため紙幅が尽き、書き直す余裕もないままに投稿してしまったことが少し心残りだったからです。それでもこの論文が認めていただけたのは、第一言語の影響など、教育実践の中で多くの方が感じることを定量的に示すことができたからでしょうか。

L1 による違いは概ね予測通りで、意外には感じませんでした。違いの程度を確認できました。さらに、意外とおもしろかったのは、1 語あたり、漢字 1 字あたりの知識獲得にかかる時間が初級は長く、中上級にかけて短くなり、上級以降で再び長くなるという結果です。漠然と感じていたことがデータで裏付けられ、その要因をより真剣に考える契機になりました。当初はついでだった学習歴のデータを採って本当によかったと思います。

この論文に限りませんが、チームで研究が進められたことは、この論文を書けた大きな要因です。佐藤を代表とする科研のチームで数年間、研究の設計、データ収集、分析、執筆を手分けして数編の論文を書いてきました。共同研究ではサボりにくくなるので研究が進みます。

また、日本語教育は、英語その他の言語の教育を含めた第二言語/外国語教育、さらには言語教育一般の広い枠で論じられるべきだと考え、応用言語学・英語教育・国語教育などの文献にも取り組み、統計やテストングを勉強してきたことが少しは実を結んだのかなと思います。漢字や漢字語の問題は日本語固有の問題である側面が強いのですが、それでも研究手法や、語と語構成要素の関係など、世界の応用言語研究の枠組みで考えられる部分がかなりあります。

今後は学術、文芸、生活など、目的に応じた語彙の習得と、文章のジャンルやレベルとの関係、読解などの各種言語スキルとの関係などを調べたいと思います。使用したテストの公開や新しいテストの開発も進めたいと思います。

本来、言語教育のクラスはできるだけ内容重視であるべきだと考えます。しかし、内容重視で進めるには、言語の理解が前提になります。より自由で有意義なコミュニケーションを作っていくために、言語レベルをどう調整すればいいのか、語彙面からアプローチできればと思います。

味わうべきは腹痛ではなくて、もっと生産的な“生みの苦しみ”ですね。

2021 年度日本語教育学会学会活動貢献賞 受賞コメント

小野 正樹 (筑波大学・教授)

このたび 2021 年度学会活動貢献賞をいただくこととなり、このような賞をいただけること、身に余る栄誉と時間の流れを感じます。

私が日本語教育学会に入会したのは、大学院生の時、筑波大学が 1996 年（平成 8 年度）春季大会の会場になった時でした。学会に入るのに推薦者が必要でしたし、大学院生が入会して、何ができるかわからないまま、「学会」という、授業とは異なる経験が得られる期待をもって入会しました。当時のつくば市は、つくばエクスプレスという電車もありませんでした。そこで、東京駅からバスなどでいらっしゃる方が、会場に無事たどりつけるよう、目印をしっかりと作ろうということになり、学内の教員・学生でピンク、ブルー、イエローの風船を、酸欠になりながら膨らませ、駅から大学構内までのポイントになる場所に置きました。風船の 3 色は、筑波ランゲージグループが作成した教科書の表紙カラーでした。学会運営のお手伝いを通じて、学内外の方から、授業ではなかなか聞けないお話をうかがえ、日本語教育についての理解や親しみが広がったことをよく覚えています。



筑波大学の教員となり、毎学期、留学生教育、日本語教師養成を通じて得られた経験は、何より面白いものでした。日本語を学ぶ人、日本語教師になりたい人が毎年世界から来てくれました。Good Learner、Good Student に恵まれました。Good Learner とはテストでいい点を取る学生ではなく、お互い考えを述べ合える付き合いができた方々で、私自身成長させてもらいました。

理事として、何ができるのかよくわかりませんでした。理事にとお声がけいただいた方の面子は汚すまいと思って、神保町に通い始めました。他の理事とお話ししていると、他の日本語教育機関の実態や考えがよくわかりました。一方で、私は学内業務も忙しくなり、理事を辞めたいと申し上げたこともありました。本務先で業務のある身では、理事は非常に負担の大きなお仕事です。そんな中で執行部からは激励をいただきました。自分自身はオーソドックスな思考をしていると思いますが、私自身とは異なる枠組みで、また私自身よりも日本語教育のことを考えている方との語らいは素晴らしい出会いでした。

勤務先大学でも、N1、N2 という用語を多くの会議で聞くようになり、「留学生」に関する議論も増え、最近では、海外の高校で学んで日本国内の大学に入学する高校生もいることから、「海外教育生」という言葉も使用されています。大学での日本語教育においても、学習者は育てる人材、育てたい人材ではなく、育てなければならない人材として、日本語教育の位置づけが変わって来ています。日本語教育学会の目的や存在価値も、今後さらに変わっていくでしょう。日本語教育がさらに密度の濃いものになって、世界で役立つ学会となってくれることを願っています。

日本語教育を支える人々には改めての感謝の意をお伝えしたく存じます。